

策をとりあげたが、神策軍は一蹶を日久しく、節度使に隷属することをお願わず、宦官の反対も出て沙汰やみとなった。

李賀が、奉礼郎として勤務していたとき、長安の都で見聞した事件である。晋脰はたしかに面白い。だが、沙汰やみになった鎮兵出動と「北中寒」の氷上渡河とはいっこうに結びつかぬ。

姚氏は、賀の詩に、杜甫の作と同様、詩史を見ようと努力した。唯美的観点に賀を閉じこめようとする人の多いなかでは、政治批評をきわめたせよとするその意図は尊重である。かれの直観は時にはさぶる尖鋭だが、それからさきの推理がお座なりで、床屋政談にあらうこともある。すでに先人が指摘し、近ごろでは葉慶炳「姚文燮昌谷詩注糾謬」(『淡江學報』第八期、一九六九年)のような卓論もあるほどだ。

李賀はたしかに杜甫に学び、その作に、詩史的要素がある。しかし賀は杜甫の亜流ではない。まして新聞記者のように事件と聞けば駆けつけて記事としたわけではない。歴史も自然もうたったけれど、史家や自然科学のように見て文字にしたのではなく、心情の核部を衝撃するもののみを歌ったのだ。「いまだ富て題を得て然る後に詩をつくらず」と李商隱がいったのはそのことを意味したとも解しうる。賀はげんに既成の禁符題で作詩しているが、山があるから登るといふうにではなく、登らざるをえぬ衝動の向うところに意思にそむかぬ山があるからそこに趣くように題を選んだのだ。

かれは、歴史的事件をうたうとき、ほとんどつねに、その事を指す鍵を詩中に置いている。註解とされる作も、鍵を見出し、逆らわずに指すところをたどれば、果実は向うから現れるはずで

ある、『北中寒』にも、その鍵があるのではないか。

四

中国人が詩文を作るとき経験を重んずることはよく知られている。経験を大別すると二となり、一は實際的体験であり、二は古典的教養だ。李賀も中国人としてのこの傾向を濃厚にもつ、二十歳で死んだかれの實際的体験は小さいが、これをつつむ古典的教養は豊かで多彩で、燦爛たる金平糖の核のケシ粒と糖衣とに似たところがある。難解なその詩をとく鍵も、体験と教養の両面に求めなければならないまい。

「北中寒」は北地をうたう作である。李賀の嗜読したと察せられる『文選』の巻九に班彪「北征賦」がある。

われ、世の顛覆するに遭い、頃塞の阨災に罹る。旧室に滅びて以て丘墟となり、暫てしほらくも甞るを得ず。遂に袂を奮つて以て北に征き、超として跡を絶ちて遠く遊ぶ。朝に軻を長都に発し、夕べに狐谷の玄宮に宿す。……

班氏は、新（九一二）末の乱に難を避けて天水郡の隗囂のもとに身をよせたが、礼遇されず去って河西の壽融につき、融に光武帝（後漢）に帰服するよう勧めた人。

文中の「軻を発す」という語は、出発を意味し、楚辞「離騷」の「朝に軻を蒼梧に発し、夕べに余は縣圃に至る」にもとづく。李賀が元和八年（八二三）、三年にわたる官吏生活をやめたと

キ「春婦昌谷」3164に

京国 心 爛漫 夜夢 家に帰ること少なり。勅を發す 東門の外、天地 皆 浩浩。とうたう、楚辭を好む人の詩に「離騷」の語が見えてふしぎではないが、ほとんど同時の作「出城別張又新酬李漢」4219に、

趙壹 賦命 薄く、馬卿 家業 貧なり。……没没 踏に舌を齧み、涕血 敢て論ぜず、……などと慷慨する所からみて、班氏に近い諷味をこの語にこめたことは間違いない。

さて、班氏の「北征賦」は長安を発して安定（甘肅省固原県）に至ったが、李賀はどうだったのか。賀の集から北地にかかわる句を引くと次のごとくである。

1012 詠懷二首 八金泥太山頂 山東省泰山

1015 春坊正字劉子歌 八直是荆軻一片心 河北省易県

1017 雁門太守行 山西省代県

八半卷紅旗臨易水……散君黃金台上意 河北省易県

1036 浩歌 八罽絲綉作平原君、有酒唯澆趙州士 河北省邯鄲、肥郷県

山東省武城

1051 南園十三首其六 八不見手年逐海上 遼寧省

1057 其十二 八誰為盧卿裁道板 河北省邯鄲

2066 馬詩其五 八燕山月似鉤 蒙古人民共和國抗愛山

2069 其八 八赤兔無人用、當須呂布騎 山西省太原

2072 其十一八千時鹽坂上V 山西省陸泉

2035 申胡子盛樂歌八申胡子辨客之蒼頭也V 北地

2093 酒罷八路幕V八露衣斷碎胡城秋V 山西省長治市

2095 仁相里雜敘皇雨湜八安定美人載勇綬V 甘肅省固原縣

2100 致酒行八主父西遊固不歸V 山東省

河北省

3114 追和何謝銅雀妓 河南省臨漳縣

3115 送秦光祿北征八雪汗玉關泥V 甘肅省玉門關

八黃龍就別鏡V 遼寧省

八青冢念陽台V 內蒙古自治區

3133 潞州張大宅病酒八當知趙國寒V 山西省長治市

八覺騎燕北馬V 河北省

3138 客遊八老作平原客V 山東省

河北省

3143 奉和二兄八笛愁翻隴水V 甘肅省隴山

3158 古鄴城童子謠 河北省臨漳縣

3168 七月一日曉入太行山 河南省沁陽

山西省晉城

4172 寧多樓子△玉塞去金人▽ 甘肅省玉門關

△一時凌遼水▽ 遼寧省

△隔隴長東西▽ 甘肅省隴山

4173 猛虎行人泰山之下▽ 山東省

4174 日出行△白日下崑崙▽ 新疆省

4180 平城下 山西省大同

4191 上之回 甘肅省固原縣(?)

4199 長平箭頭歌 山西省高平縣

4201 塞下曲△薊門白於水▽ 河北省薊縣

△天含青海道▽ 青海省

△馬嘶青海白▽ 內蒙古自治區

4205 呂將軍歌△恆山鐵騎請金槍▽ 河北省正定

5235 高平縣東私路 山西省高平縣

李賀の家居の地昌谷、勤務地長安を基準にして、それより北にあたるものをあげたが、唐代の鄙人の感覚からすれば、山東は東方の地、甘肅の黄河以西と青海、新疆は西方の地、であつたろう。それらを除いたものの約三分の二は質の古典的教養とかわるもので、かれが実際に歩いたと考へうるものは、河南の北部と、山西、河北に限定される。

限定された三つの地方と「北中寒」とのかかわりをさぐるとき、忽然として浮びあがってくる

のが、ヤキに詳説を保留した「氷合」の語である。

五

『後漢書』卷一、光武皇帝紀の更始二年の条に「氷合」の文字がみえる。

李膺が光武帝に親しみを感じていたことは疑いなく、時にはおのれを帝に、従僕の巴重を帝の腹心の將軍馮異にたぐえたであろうこと、拙稿「独吟聯句昌谷詩（一）」（一九七一年）にのべた。

いまわたしがあげた『後漢書』は劉宋の范曄の撰だが、その前に漢の劉珍の『東觀漢記』をはじめ數十種の史書がある。光武の事跡を知るために、膺が何に拠ったかはわからぬが、晋の袁宏の『後漢紀』に記し『後漢書』にのせぬことも、かれは知っていたらしく感ぜられる。それらを参考しつつ「北中寒」を解くに必要と思われる事を次にのべる。

後漢の初代、世祖、光武皇帝の劉秀は、字を文叔といい、南陽蔡陽の人である。前漢の高祖劉邦の九代目の孫である。九歳のとし父を失い、兄劉縯らとともに、叔父の劉良に養われた。

身長七尺三寸（約一七一センチ）、ひげや眉が美しく、口大きく、鼻高く、ひたいが秀でていた。元の縯は俠客肌で、客分を養い、秀の農事を笑った。

新の末、天下は連年蝗害にあり、農民の反乱が各地に起った。地皇三年（二二）南陽は飢饉と

なり、土豪の客分て盜賊になるものが多かった。秀も役人の目をさけて新野にゆき、穀物を宛で売った。宛の李通という人が予言書によつて「劉氏が再興し、李氏がこれを助ける運命にある」といった。秀はその劉氏を自分のこととは思えず、兄の續かもしれないと考へた。王莽が敗れる兆候があり、天下が乱れるだろうと見て、計画を立てて兵器を買いこみ、十月、李通らと旗上げした。時に二十八歳。

晉陽に還ると、續も兵をあげたところだつた。續はかつて人を殺したことがあり、青年たちはおそれて寄りつかなかつたが、赤衣大冠をつけた秀の姿を見ると、安心したようであつた。

次の年へ二三、續は進んで死を固めた。二月、更始將軍と自称していた族兄にあたる劉玄が、未將らに擁立されて天子となり、改元して更始元年と称した。このとき續は時期尚早といったが、聞かれなかつた。更始は、續を大司徒に、秀を太常偏將軍に任じた。

三月、秀は潁川を攻略した。馮異らがこのとき帰投した。五月から六月にかけて、王莽の軍と戦い、大いに勝った。劉縯兄弟の名声があがるにつれて、これを嫉視するものが増える。天子と称した更始もまたそのひとりだつた。劉秀は気づいて兄の續に注意するようにいったが、續は笑つて氣にとめようとせぬ。續の部將に劉縯という勇士がいた。更始が天子となつたとき、怒つていった「まず大事を起したのは伯升兄弟だ。更始はいつたい何をしたのか」伯升とは續の字である。更始が縯を抗威將軍としたが、縯は受けようとせぬ。更始は縯をとらえ殺そうとした。縯が反対する。未將らの勧めで更始は縯をとらえ、その日のうちに殺した。

秀は駐屯地から宛に配せもどり、更始に兄の不始末をわびた。おのれの軍功をほこらず、亡兄

のために服喪することもなかった。更始は慰じて、秀を破虜大將軍とし、武信侯に封じた。秀はしかし、ひとりでいるときには酒肉をとらず、しばしば涙を流した。馮異がいった「天下の人はみな王莽のために苦しみ、漢朝の復興を望んでいます。各地の反乱軍も掠奪にあけくれ、人々は失望しています。あなたがいま恩徳を施されたら、天下の心はあなたに集りましょう」秀はその言葉に従い、異をつかわして宣撫させた。

九月、長安で王莽が殺され、その首が宛にとどいた。更始は洛陽を都とすることにし、劉秀を行司隸校尉として先行して宮府をととのえさせた。更始は洛陽にけくと、秀を破虜將軍行大司馬事とし、十月、黄河の北方に向かわせた。このころ南方では童謡がはやった。

かなうか かなわぬ

諧不諧

赤眉しだいじゃ

在赤眉

とれるか とれぬは

得不得

河北しだいじゃ

在河北

赤眉とは樊崇のひきいる反乱軍の一派で、王莽の軍隊とまぎれるのを避けるため目のうえに赤い隈どりをさせたので、そうよばれたのである。かれらは今は劉秀にとっての最強の敵である。

劉秀が邯鄲につくと、その地の王族で前漢景帝の八代の孫にあたる劉林がやって来て秀に説いた。「赤眉は河の東にいる。河は列人（河北省肥郷県東北）から北流する。そこで決壊させたら、百万の軍も魚になるさ」この「河」はいまの滏陽河をさすのであろう。軍とともに民衆もまた水没するのである。秀は答えず、去って真定（正定）に行った。

劉林はそこで、売卜をやっていた王昌という男を、前漢成帝の子の劉子嬰なるものに仕立て、赤眉もまた劉子嬰を擁立するものと宣伝した。劉昌は河北の豪族でこれに付くものが多く、十二月には天子と称し、邯鄲に都した。王昌を多くの史書はその字により王郎と称する。

更始二年（二四）正月、劉秀は、王昌の勢が盛んになったので、さらに北行して薊（大興）に身を寄せた。王昌は劉秀に十万户の賞を懸けた。秀が部下を市中にやって王昌討伐の兵勇を募集したが、市人は大笑いしてからかうので、使いはほうほうのていで帰ってきた。秀もあきらめて南歸しようと思った。上谷太守の子の耿弇がいう「いま敵兵が南方から来るといふのに南に歸ることはできません。漁陽の太守彭寵はあなたのお国の方、上谷の太守はわたしの父です。この両郡で軍勢をととのえたら一万騎、邯鄲もものかは、です」ところが秀の部下はみな南地の者ばかり「死んでも南を向きたいのに、北行してなんで袋の中のネズミにならねはならんのか」秀は弇を指していった「かれがわれらの北道の主人だ」

前漢武帝の六代の孫にあたる劉棻がこのとき薊で兵を起し王昌に応じようとしたため、城市はこったがえし、邯鄲の使者がやってくるといふ噂で、役人たちがみな迎えに出るといふ騒ぎ。劉秀は車を急がせて城南に出たが、耿弇とけくれ、部下もついて来ないものがあった。まちを見つけてもうっかり入れず、野宿をかさね、饒陽の郊外にたどりついた。馮異の才覚で数日ぶりに豆粥をすすったが、それも一時のしのぎ。

劉秀は思いついて、邯鄲からの使者と称して饒陽のまちの客館にいった。役人が食事を進めると、飢えた徒者が争って奪い取る。役人は、これはくさいとにらみ、太鼓を數十ぺん打って、

「邯鄲の將軍のおいで」と呼ばわった。邯下はみな色を失い、劉秀も車に乗って駆け出そうとしたが、逃げおおせめ場合のことを考へ、おもむろに座にかえり「邯鄲の將軍をどうぞこちらへ」といった。それからしばらくのち、車で去った。客館の役人が、城門を開けるように通報したが、門長は「天下のことなど知ったことが、長者を開きめておけるかい」といった。

こうしてやっと南に出、晝夜兼行、霜雪を犯して進む。天候寒く、顔面みな破れ裂け、呼沱河のほとりまでたどりついた。斥候がかえってきていう「河には流水がながれ、船がなければ渡れません」劉秀は邯下の王霸をやって確かめさせた。王霸は考へた。王昌の軍が追撃してくるうわさもある。ここでみなをびくくりにせたらいいよ、渡りようがない。とにかく河岸まで来たうわさの水の陣という手もある。で「氷が堅くて渡れます」と報告した。将兵は大喜び、到着するころ河面の氷が合わっていた。一行は氷上を渡り、あと数騎で完了というとき氷がとけた。

南宮までやってくると大風雨にぶつかり、道傍の空舎にかけこんだ。馮異が薪をあつめて来て、焚火をしまだ麦飯をつくって進めた。下博城西で道に迷ったとき、道ばたにいた白衣の老人が指していった「がんばりなさい。信都郡は長安のお身方です。ここから八十里（約三五里）です」劉秀はただちに馳せた。信都では太守任光が門を開いて出迎えた。

氷上渡河のところを『後漢書』の原文は次のように記す。

晨夜兼行。蒙犯霜雪。天時寒。面皆破裂。至呼沱河。無船。適遇冰合。得過。

ここにいう「呼沱河」はいまの滹沱河で、山西省の寧崎県の東北の大戡山を源とし、太行山脈

の五台山と繫舟山の峡谷をくぐりぬけて、河北の平野に入り、饒陽の東方の商林のあたりで滏陽河と合流して子牙河となり、天津を通って渤海湾に注ぐ大河である。

劉秀の渡河点は『元和郡縣志』卷一八によれば深沢縣南二十五里（約一四公里）といい、『讀史方輿紀要』卷一四が晋州城東十八里という。両記述を地図に求めると一致するようである。そうしてそれは饒陽の西南に約四〇公里にあたろうか。

六

饒陽の南といえは、それは、武徳四年九月、李神通が劉黑闥と戦って敗れた、といわれる処である。拙稿「李神通」へ「李賢研究」一六三ページにては、この事件を五行で片づけたが、ここではもう少し詳しく述べよう。

この件についてもっとも詳細なのは『資治通鑑』である。

淮安王神通、關内の兵をひきい、冀州に至り、李藝の兵と合す。また、邢・洛・相・魏・恒・趙等の兵を發し、合して五万余人。劉黑闥と饒陽城の南に戦ひ、陣を布くこと十四里。黑闥の家は少きも、隙に依りて單行して陣し、以てこれに當る。たまたま風雪なり。神通、風に來じてこれを撃つ。既にして風返り、神通大敗し、士馬軍資、失亡するもの三分の二。李藝は西偏に居り、高雅賢を撃ち、これを破り、逐奔すること數里。大軍の不利を聞き、退いて葦城を保つ。黑闥すなわちこれを撃ち、藝もまた敗る。……藝、兵を引いて幽州に帰る。

黒闥、兵勢大いに振う。

(卷一八九)

『旧唐書』卷一高祖紀にも卷二太宗紀にも武徳四年九月には全く記事がない。『新唐書』卷一高祖紀には短い記事があるがこの事件とかがわりなく、卷二太宗紀には記事はない。『通鑑』の前引記事中の省略したところは、

薛万均、万徹、みな(劉黒闥に)虜にせらる、髪を截つてこれを駆る、万均兄弟亡げ帰る、とある。それならば、敗れたのちの神通の行動についても記してよさそうなのに、それが無い。

『旧唐書』卷六〇、淮安王神通伝には次の記事がみえる。

復た河北道行台尚書左僕射を授けらる。太宗に從い劉黒闥を平ぐ。左武衛大將軍に遷る。貞觀元年、開府儀同三司に拜せられ、封五百戸を賜る。時に太宗、諸功臣に謂いて曰く「朕公等が勲效を敘し、封邑を量定す。恐らく尽す能わざらん。まさに各に言うべし」と。神通曰く「義旗の初めて起ころや、臣、兵を率いて先ず至る。今、房玄齡・杜如晦等、刀筆の人なるに、功は第一に居る。臣、且た服せず」と。上曰く「義旗初めて起ころや、人皆心あり。叔父は兵を率いて先ず至るといへども、未だ嘗て身行陣を覆ます。山東未だ定まらざりしとき、李勣を受けて専征し、(勣)憲徳南進して全軍陷没せり。劉黒闥の翻動するに及び、叔父は風を望んで破れたり。今、勲を計り賞を行ふに、帷幄に籌謀し社稷を定むる功あり。漢の蕭何の馬に汗するなしと雖も、指縱推轂する所以。故に功第一に居る。叔父は国に於て至親、誠に愛しむところなきも、必ず私に縁つて濫に勲臣と賞を同じくすべからざるのみ」と。なお、卷六六、房玄齡伝に「このときの論功行賞をのべ、

玄齡および長孫無忌・杜如晦・尉遲敬徳・侯君集五人を第一となす。（玄齡は）邢国公に進爵し、実封千三百戸を賜う。

このあとに、神通伝にみえる太宗と神通の問答がそっくりそのまま続き、さらにいう。

初め、將軍丘師利等、咸な自らその功に矜り、或いは袂を振いて天を指し、手を以て地に画きめ、神通の理の屈するを見て、自ら相謂つて曰く「陛下は至公を以て行賞し、その親に私せず。吾が属、何ぞ妄りに訴えんや。」

太宗のことはの通りだとすると、神通伝の「太宗に従ひ劉黑闥を平ぐ」というのは、武徳四年の戦いとは別のことであろうか。この時以後、唐朝が劉黑闥を平定するまでの経過を『通鑑』によって記せば次のようになる。

武徳四年十二月乙卯、劉黑闥は冀州を陥れ、執史彌接を殺した。黑闥は淮安王神通を破つてから、魏地方に融れを出し、もとの舊唐徳の將卒は争つて唐の官吏を殺し、黑闥に交じた。庚申、右屯衛大將軍義安王孝常を遣つて黑闥を討たせた。黑闥は数万の兵をひき、京城に通つた。黎州總管李世勣は京城に駐屯していたが、城を捨てて洛州に逃れた。甲子、黑闥は追撃し、歩卒五千人を殺した。世勣は身ひとつで逃げた。黑闥はついで相州を抜き、黎州、衛州を取り、半丘の間に寧建徳の旧領を回復した。また使をやつて突厥と連絡した。右武衛將軍秦武通、洛州刺史陳君賓、永寧令程名振はみな河北がう、長安に逃げ帰つた。丁卯、秦王世民、齊王元吉に命じて黑闥を討たせることになった。己巳、劉黑闥は邢州、趙州を陥れた。庚午、魏州を陥れ、總管潘道毅を殺し

た。辛未、辛州を陥れた。

武徳五年（六二二）春正月、劉黑闥はみすから漢東王と称し、天造と改元し、洺州（河北省永年県）を都と定めた。美瑱、東塩州治中の王才藝が刺史田華を殺し、劉黑闥に依じた。秦王世民の軍が覆唐に到着した。劉黑闥は相州を棄て洺州に退いた。丙申、世民が相州をとりもどした。軍を肥郷に進め、蒼を洺水のほとりにつらねた。己酉、幽州総管李藝が兵数万をひき、秦王世民の劉黑闥討伐に参加した。黑闥はこれを知り、兵一万をとどめ部下の范願に洺州を守らせ、自ら兵をひき、蒼の進出を拒ぐため沙河に出た。程名振が鼓六十具を洺州城西二里の堤上にならべ、乱打した。范願はびっくりして、黑闥に急報する。黑闥は馳せ還り、弟十善らに兵一万をつけ、蒼を藪城に撃たせた。壬子、徐河で戦い、十善らは大敗して八千を失った。洺水の李去惑が来降したので秦王世民は王君廓をやった。君廓は千五百騎をひき、入城し、去惑と共に守ることになった。

二月、劉黑闥は洺水を攻めるため兵をひき、癸亥、列人に到着した。秦王は秦叔宝に攻撃させ、これを破った。己巳、秦王は邢州をとりかえした。辛未、井州の馮伯諫が来降した。丙子、李藝が黑闥領の定・衆・廉・趙の四州を取り、黑闥の尚書劉希道を獲え、兵をひき、洺州で秦王と会合した。黑闥は洺水攻撃を急いだ。城は四方が川に囲まれている。黑闥は東北に二筋のかけはしを築いて攻めた。世民は三菱兵をひきいて救おうとしたが、黑闥に拒まれて進めない。世民は王君廓が城を守り切れないことを恐れ、諸将を召して相談した。李世勣がいう、かけはしが城に達したら城はきつと守れません。行軍總管の羅士信が君廓に代って城を守りましようとい

う。世民は城南の高塚に登り、旗で君霸を招いた。君霸が囲みを破って出、士信が二百騎をひきいて入城した。黒闥は昼夜急攻する。たまたま大雪が降り、救兵は往くことができない。八日たち、丁丑に城は陥り、士信は殺された。辛巳、世民は洺水を抜いた。

三月、世民と李藝は洺水の南に營をおき、水北にも分屯させた。黒闥が挑戦しても応せず、別に奇兵をやって糧道を絶たせた。

秦王世民と劉黒闥の持久戦は六十日をこえた。黒闥は李世勣の營に奇襲をかけた。掩護に出た世民は黒闥の部隊に囲まれた。尉遲敬徳が壯士をひきいて突入したので、逃げ出せた。世民は黒闥の糧が尽きたら必ず決戦してくると考え、人をやって洺水の上流を堰かせ、こう命じた。わたと賊とが戦うようになつたら水を放流しろ。丁未、黒闥は歩騎二万をひき、洺水を南に渡り、唐の營を圧して陣した。世民は精騎をひき、黒闥の兵をふみちらした。正午から夕方まで数合の死戦の末、黒闥は逃げた。部下は知らずになお戦っている。そのとき洺水は放流され、深さ丈余。黒闥部隊は潰れ、斬首万余級、溺死数千人。黒闥ら二百騎は突厥に奔走し、山東は悉く平定した。

これを讀むと、山東に平和がやゝてきたようだが決してそうではない。兗州總管魯郡公徐円朗はかねてから劉黒闥と通じ、その大行台元帥となり、武徳四年、魯王と自称していたが、秦王世民に敗れて劉黒闥が突厥に逃げたのも、その形勢は不穩であった。

六月辛亥、劉黒闥は突厥の兵をひき、山東を犯し、李藝がこれを撃った。乙卯、淮安王神通